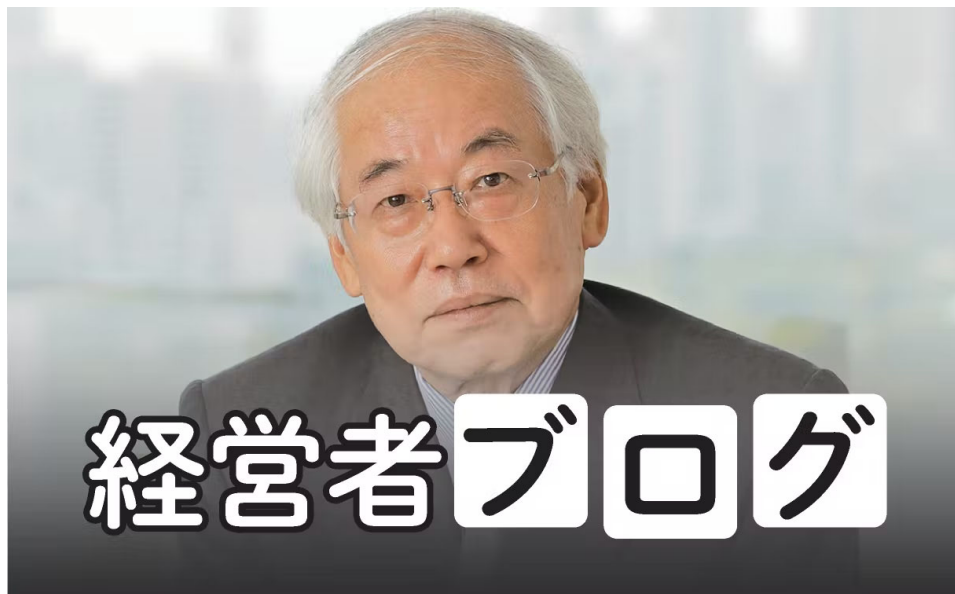


旅人のあんころ餅

経営者ブログ 鈴木幸一 III会長

2021/1/5 2:00 | 日本経済新聞 電子版

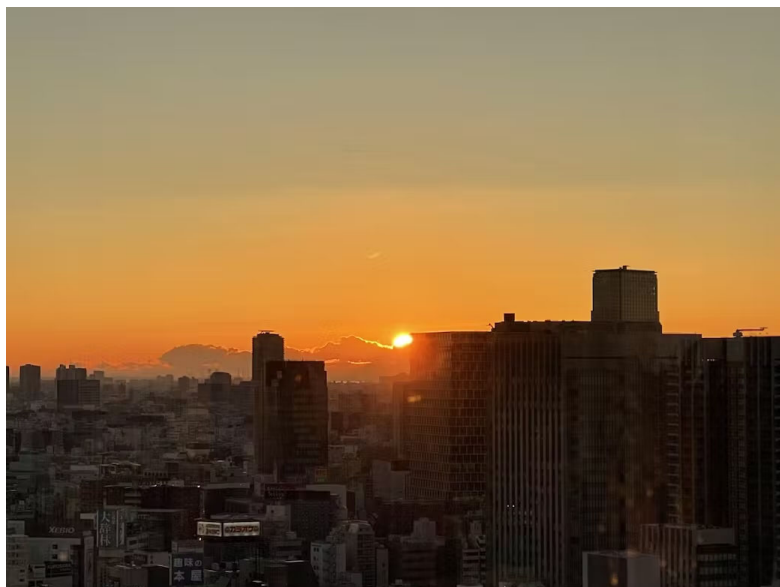


あけましておめでとうございます。

1年が、1枚の紙ぺらのように、あっという間に終わる。記憶すらつかの間の絵空事のような。それでも、新年となり、新たな1年が始まった。

■大みそかから元旦、夢か現実か

暮れの昨年12月30日に、ひと通りの用事を済ませ、大みそかから、なにもせず、家に籠り、書物を手にソファや机に向かうのだが、気がついた時には、いつも居眠りをしていた。本はページが開かれたまま、顔の横にある。それなら、本など持たず、ベッドにもぐりこんで、おとなしく眠っていればいいのだが、せっかく、自由に使える自分の時間、眠ってしまうにはもったいないと、あれこれ、思いつくのだが、取りあえずは、放っておいた本を読もうとするのだが、すぐに眠りに襲われてしまうのだ。少しは眠気に抵抗を試みようとするのだが、気がつくのは、既にひと眠りした後、居眠りから覚めた時なのである。反省をしながら、コーヒーを沸かして、ひと飲みし、場所を変えて同じ試みをするのだが、気がつくときは、同じ、居眠りの後である。そんな繰り返しが続き、大みそかから元旦にかけて、ひたすら夢か現実か、境のない時間を過ごしていた。



初日の出

大みそかから元旦にかけて、東京都の新型コロナウイルスの感染者数が1日に1300人を超すなど、増加傾向が顕著になっていることで、1都3県の自治体の首長が、政府に対し、「新型コロナウイルス特別措置法に基づく緊急事態宣言」の発表を要請したといったニュースが報道されるなど、年が変わっても、新型コロナウイルスの拡散が深刻な状況にあることは変わらない。新型コロナウイルスの感染が広がるなか、国民1人当たり10万円の給付に始まって、Go To トラベル、Go To イートなど、困窮者や業界の救済にしても、首をかしげたいような政府の施策が相次いでいたのだが、今度はどんな施策が持ち出されるのだろう。いまや、債務が溢（あふ）れている国の財政事情はさておき、いくら国債を発行してでも、コロナ対策ならば、歳出の増加について、異論は許さないといった世論のようだ。欧米でもコロナ禍により経済の底が抜けることを恐れて、膨大な額の予算を組んでいるのだが、そう簡単に、V字カーブによって、すぐにも経済成長が実現するわけでもなく、私のような高齢者の感覚では、常軌を逸した措置による後遺症を恐れるばかりである。



ブーゲンビリア

■疑問が膨らむプロジェクト

ちょっと考えるだけでも、国の財政については、あらゆる崩壊の局面が想定されるのだが、どんな巨額の債務が残ろうと、ロール・オーバーという伝家の宝刀で、金融や債務の崩壊が免れるわけでもないだろう。理論値を計算しようがないほどの信用の拡大を続けることで、世界経済が立ち直るとしたら、それはそれで怖いものである。秋までには総選挙が実施されはずの現在の日本では、あらゆる政党が、基本は、バラマキという形で、国民に媚（こび）を売ることを優先する競争のようで、本当に怖い状況について、国民に説得力のある説明をされることは、まずないと思っていた方がいいようだ。年ごとに、平均寿命が延びて、多くの人が、毎年のように記録を更新する長寿社会に生きることになるのだろうが、その社会基盤が、毎年、基礎から壊れていく過程での長寿社会だとすると、それも怖い話である。取りあえず、先のことはさておいて、今、生きていくうえで、ささやかでも「豊かさの欲望」を満たそうと、きゅうきゅうとしている人々に対し、「Go Toトラベル」というのは、ある意味、政治家にとって、巧みなマーケティングだったようだが、この状況で、政府が率先して税金をつぎ込むほどのプロジェクトだったかどうか、疑問が膨らむプロジェクトであることは間違いない。



ボタン

「無限の過去の或時に始まり 無限の未来の或時に終わる 人命の旅」。西脇順三郎の詩「旅人かへらず」の一節だが、寂しさについて、純度の高い記述である。この一節は、こんな言葉で終わる。「ここは昔広尾ヶ原 すすき真白く穂を出し 水車の隣に茶屋があり 旅人のあんころ餅ころがす この曼陀羅（まんだら）の里 若き水鳥飛び立つ 花を求めて実を求めず だが花は実を求める 実のための花に過ぎぬ」

■春の音楽祭、ギリギリまで開催に向けて努力

「今度のニューイヤーコンサートのように、いやな年を忘れて、新しい年を祝う喜びを謳歌する演奏会なのに、静寂の中で曲が始まり、曲が終わっても静まり返っているというのは、どんな状態なのだろう。ポルカのように、観客の気分が高揚して感動や興奮が演奏者に伝わってこそ、素晴らしい演奏が生まれるのだが。元旦、ひとりの聴衆も入れず、興奮もなく、静寂が支配するホールでのシュトラウスの演奏はどんなものになるのだろうか」と、周りの人には、聴衆のいない新春の演奏会に対する当然の危惧を口にしていたリッカルド・ムーティさんが指揮したウィーン・フィルのニューイヤーコンサートをテレビで眺めていた。確かに、例年の着飾った聴衆のいない、華やいだ雰囲気があったくないウィーンのフィルハーモニー・ホールでの、ムーティさんの演奏は、客席とのやり取りがなかった分、シュトラウスにしては彫りが深く、きりっとした演奏で、それはそれで面白かったのだが、なによりも、演奏会後のムーティさんの文化や音楽に対する真摯で愛情あふれる短いスピーチに、共感させられた。「生きることの喜びや悲しみにおいて、人を豊かにするのが音楽であり、文化なのだ」と、訴えるムーティさんの表情は音楽への限りない尊敬の思いがあふれていた。

ムーティさんとは、今年の「東京・春・音楽祭」でも、若い演奏家を育てるために始めた東京アカデミーにおける2つ目のオペラとしてヴェルディ作曲「マクベス」の公開講座と演奏会を予定している。ただし、新型コロナウイルスの感染状況によっては、昨年と同様、中止となる可能性も否定できないのだが、開催に向け、ギリギリまで努力を続けるつもりである。

【関連記事】

- ・ [Go To トラベルと習近平主席](#)
- ・ [地球儀で考える習慣がなかった？](#)

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.